

感じる。生産者のココロ
だからやっぱり地元のもの！
JA秋田ふるさと

食す前に読む

ふるさとの

旬を育む

今の旬「スイカ」
育む人 佐藤 文雄

さん(横手市・東里)

JAがお届けする
農家と消費者を繋ぐ
野菜のちよっといい話。

人たちの話。

生産者の堅実な“汗”が
夏の食卓に“涼”をもたらししてくれます。

出荷最盛期を迎えた広大なスイカ畑で、摘果作業に勤しむ佐藤さん。まるで我が子のように、ひとつひとつの玉の成り具合を確認し、均等に陽があたるように玉回しをしていく姿に、栽培・管理への誠実さがうかがえます。

水稲二刈のほか、普通・整枝^{せいし}遅出し、それぞれの栽培方法で、八十坪にスイカを作付け、主に夫婦で日々の管理を営みます。

「今年はや暖冬の影響が懸念されたが、今のところ着果(玉の成り)の具合も順調だ」と話すとおり、青々と茂るツルの影からは、丸々と肥えた大粒の玉が見え隠れしています。スイカ栽培における正念場は、出荷を目前に控える梅雨時。水はけ

や日当たりなど、病害虫を防ぐため、圃場の細部にいたるまで神経を尖らせます。

天候に左右されやすいといわれる農業。しかし佐藤さんは、注意深い観察力と丁寧な栽培管理で、これまで何度となく自然の脅威を切り抜け、高品質なものを安定して出荷し続けています。

佐藤さんの農業における身上は、とにかく継続すること。「規模拡大や機械の購入も時には必要だが、今を直視し、着実に手がけていくことを心がけている」と、堅実に営むことの大切さを訴えます。出荷期間の短い作物だからこそ、その思いは一人なのでしよう。

夏の夜長に一時の涼をもたらしてくれるスイカ。その影には、生産者が圃場で流す汗と、直向な努力があるのです。

横手のスイカ

横手市は作付面積二二三〇畝、販売数量九千トを超える(平成十七年度実績)、県内一の大生産地。雄物川町地域、十文字地域を中心に栽培される。

出荷最盛期は七月下旬〜八月月上旬。スイカを積み、集荷所へ向かうトラックが列を作る風景は、横手の一つの「夏の風物詩」ともいえる。